オオイタデジタルブック DIGIAL BOOK OITA

別府今昔

BEPPU CONJYAKU

流川物語り(10)

第百二十三話●米軍の置き土産

第百二十四話●【日名子物語1】14歳で小学校教員

第百二十五話●【日名子物語2】上等温泉制度

第百二十六話●【日名子物語3】最大の武器、宣伝

第百二十七話●【日名子物語4】小説「百合子」

第百二十八話●【日名子物語5】恐るべき卓見

第百二十九話●【日名子物語6】日名子君太郎

「別府今昔」「オオイタデジタルブック」について

初版 二〇〇六年七月二十八日発行

大分合同新聞社

次ページへ

●流川物語り　第百二十三話●

米軍の置き土産

昭和四十年三月十五日掲載

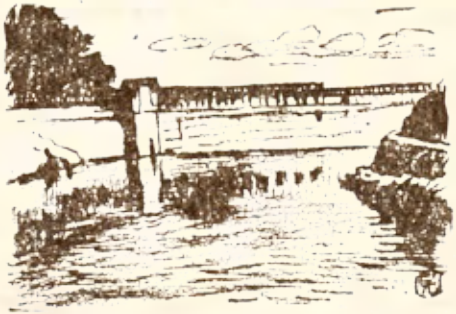
神沢市長時代の水道拡張工事で大いに働いた人物は山田耕平（先代）、池部守松、岩尾米造、和田嘉七、金居曹三、安部三郎、高橋欽哉、河村観三、友永平次郎、河村土五郎、神爛二、藤原勝、手島森太郎、西村真吾郎、安部栄次、小林夏らだった。

委員連中は第一期工事のときのように地下タビ姿で現場に出かけた。どこの都市でも水道工事には汚職に似たような事件が起こりがちだったが、石崎貞二郎という技術の中心人物がへんくつなほどの誠実一点張りだったことと、町財政の運命を左右する画期的大工事だけに、当時の町会、それにひきつづく市会の人たちも、手べんとうで全員が工事の先頭に立ったものだ。三十余年間水道課長の席にあった石崎さんが、ひとりむすこを大学にやるのがせいいっぱい、退職したときには小さな借家に移って、ようゃく老後を送るという清貧な技術者の生活だった。

別府の水道今昔物語りは昭和二十年十二月、石崎課長の退職で幕を閉じるべきだが、全国でただ一カ所アメリカ軍が日本に置きみやげをしてくれた別府水道近代編というものを書き残さねばならない。ここでもまた定年退職した石崎さんが別府のために大きな功績を残してくれている。

終戦翌年の昭和二十一年七月十四日、別府市野口原の松林のまん中で米軍キャンプ起工式が細田徳寿知事によって行なわれた。「十二月のクリスマスまでになんとしても完成させよ」という軍命令を伝えた若い米軍将校の名はバーナー中尉、この青年将校は同じようなことを同じ日、石崎さんをつかまえて命令した。「クリスマスまでにアメリカ軍専用の水道をつくれ」

何百人くるのか何千人くるのか、別府キャンプに進駐してくる兵隊の人数は軍の機密でいえないという。



米軍の置き土産「鮎返りダム」

水をのむ人口がわからねば計画のたてようがないと説明するとバーナー中尉も仕方なく、小さな声で「三千人分でよい。ただしクリスマスまでに完成して上等の水道の水をアメリカ兵にのませる義務がある」とおどかすようにささやいた。

日本側には材料がなかったのでバーナー中尉は第八軍命令として大在の旧日本軍の兵器廠から鉄管を徴発してきた。中尉は別府の地図をひろげてダム建設地を境川上流か鮎返りのどちらかに即決を迫った。石崎さんは鮎返りに中尉をジープで案内。「この谷川の水をキャッチしたい」と話した。

「上に畑はないか」「畑はない」「それならOK」。

たったこれだけの短い会話で満水貯水量約六万トンの鮎返りダムは着工された。ライオン印のアメリカのセメントが送りこまれ、別府市民がブルドーザーというものを初めてみたのもこのときだった。大きな松の木を根っこからひっこ抜くのにびっくりした。

世界の水道の草分けといわれるローマの水道が、百四キロも離れた遠い水源から引かれていることを考えると、近代科学力を誇るアメリカ軍の目には、鮎返りから目の下に見える野口原の兵舎まで水道を引くことぐらいはなんでもなかっただろうが、石崎さんにとっては夜も眠れぬ苦労だった。

アメリカさんが日本に残した施設の中で市民生活にこれほど役に立つものをもらったのは全国でも別府だけ。朝見の片すみに八十四歳で元気にくらしている石崎さんには「名誉市民」の称号ぐらいおくってもよい。N

●流川物語り　第百二十四話●日名子物語1

14歳で小学校教員

昭和四十年三月十六日掲載

日名子の系図は古い。どこの系図も先祖の一番の始まりは何代目かの天皇家に結びつくか、源氏か平氏のどちらかの出というようなことになっているものだが、別府市誌によると文永九年（一二七二年）大友九代頼泰の時代に日名子太郎左衛門尉清元が温泉奉行を命ぜられて、別府温泉との縁の深さを示している。

大友家興亡の歴史と別府とのつながりは、石垣原合戦の悲話によっても明らかなようにきわめて深い。石垣原をめぐる戦いが別府を戦場化したこと、激しい合戦で別府の

村人たちがどんなに多くのものを失ったかは推察できよう。慶長五年（一六〇〇年）いまから三百六十六年前のことである。

しかもこの合戦よりわずか四年前の慶長元年七月十二日午後四時、別府湾が震源地といわれる大地震に見舞われた。

昭和四十年度版の理科年表（東京天文台編さん）によると、このときの大地震は震源地が東経百三十一。七度、北緯三十二・三度（別府湾南東部）で震度六・九という激震（津波あり瓜生島沈下す、死者七百八人）となっている。もっとも信頼できる理科年表だからこの数字は信用してよい。

元禄七年（一六九四年）別府を訪れた貝原益軒先生も別府の古老の伝え話としてこの大地震のことを「豊国紀行」という旅日記に書いているが、それによると「別府村ことごとく海となる」とあり、さらに元禄五年別府に遊んだ臼杵の多福寺住職も「別府湯記」の中で「大地震動し人家数百一時に水に没す」という話を古老から聞いたといっている。

資金も資材も乏しいそのころの別府の村民たちが、大地震でほとんど全滅的な損害を受け、ひきつづく大合戦に巻きこまれたことを考えると、別府の土地に生きながらえて家系を伝えることが、どんなに困難なことであったかがわかる。

府内屋のあった日名子ホテル付近

日名子家関係の系図的な物語りをぐっと近代に引き寄せると、文化年間（一八〇四年）当時の湯株（温泉の権利のようなもの）保有者十八軒の名前のトップに「府内屋太郎兵衛」、ついで文久二年（一八六二年）ときの府内屋太郎兵衛が村から流川の横の沼地を買いとり、これを埋めたてて畑にしたことが出ている。現在の「ツルミ」のある桜町一帯がこの埋め立て地だという。

府内屋太郎兵衛は襲名でつづき、そして明治、大正から昭和前期の別府の歴史に登場する第一の人物「日名子太郎」は府内屋太郎兵衛の長男として慶応元年（一八六五年）四月二十三日に生まれた。母は亀川村の庄屋高橋敬一の姉「喜世」。太郎の幼名は夏太郎。小さな村から国際温泉都市へと急速に発展した別府発展史に「日名子太郎」の名が不滅の光りを放ちながら、先覚的努力の足跡を驚くほどの新鮮さでわれわれに示している。

父太郎兵衛も明治三年の別府港築港工事のさい、指揮世話方を大庄屋高倉定三とともに県知事から命ぜられているのをみても、別府を代表する実力者だったことがわかる。長男の太郎は明治四年（七歳）に海門寺学校（小学校）に入学、十二歳で下等学校を卒業して海門寺学校の上等学校に進学、翌年まだ生徒のままで下等学校の助教をつとめるという秀才だった。

翌明治十一年、第一回卒業生として卒業すると、太郎少年は正式に教員に任命された。十四歳で小学校の先生になったわけである。

面長で鼻が高く、涼しい目と心のやさしい評判の美少年だった。

●流川物語り 第百二十五話 ●日名子物語2

上等温泉制度

昭和四十年三月十七日掲載

少年教員の日名子太郎先生は大いに感激して教壇に立った。しかし明治七年彼が十歳のときには父の太郎兵衛（六八）を失い、先生になって二年目の明治十二年十五歳のときに母喜世さん（七六）も他界してしまった。両親をなくした太郎は涙をのんで教職を離れ、家業の汽船問屋（回漕店）と宿屋をついだ。学問への道を忘れることができずに、ひまをみては「豊後国志」を筆写しはじめたのがこのころからだった。

彼の少年時代に多くの影響をあたえた恩師の橋本竹香先生が明治十六年に死去したとき、十九歳の彼は海門寺境内に恩師の碑を建てている。やっかいな家業のなかでも彼の向学心は燃えさかって、明治十九年には田口卯吉の大日本人辞書に甲斐東廓、後藤碩田伝を寄稿。

「明治二年弟益太郎生る」。彼の日記に書いたその益太郎が二十五歳のとき、「弟益太郎に宿屋を譲り学問に専念す」と彼の年譜にあるとおり人生のコースを転じた。太郎三十歳、そして住所をやがて西法寺の前に移す。村から町へと急速に発展する別

府のまんなかで、学問の道を歩く彼の目が別府の変わり方に向けられはじめると、町づくりの渦中に理想をふりかざして彼はとびこんでいく。

合併前の最後の別府町長、そして浜脇町と合併して最初の町長、明治三十九年のことである。顔立ち、すらりとしたスタイルのよさ、整った教養と誠実さと、それにだれよりも強い郷土愛にあふれていた。

明治四十三年七月、初代町長の任期満了で日名子太郎は町長の席を吉田嘉一郎に譲った。吉田町長は行政的手腕家として多くの事跡を残した人物、台湾で役人生活、ついで満州で高官の地位についていた人で、町長就任の条件に「日名子太郎が助役になってくれること」を持ち出した。

前回の町長に助役就任を求めた吉田と、それをよろこんで引き受けた日名子太郎のこの二人には「大別府建設」の共通の夢があった。なんのくったくもなく、格下げの日名子助役は自分の理想につき進んだ。上水道と市区改正、古く小さく、むさくるしい共同温泉の近代化、自分が町長時代につくった上等温泉取り締まり規定の実施、そして初めて温泉課を設置して日名子助役がその初代課長を兼務した。

上等温泉取り締まり規定は改築の不老泉と浜脇西温泉に適用された。

▽不老泉特等及び西温泉上等の入浴者に対しては左の待遇をなすものとす

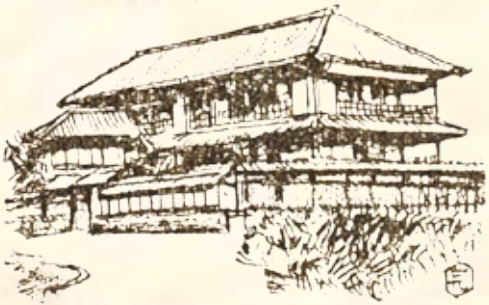
一、…不老泉特等入浴券を所持する浴客は三階に案内し、茶菓、浴衣、手ぬぐい、石鹸を供す

二、…同第一種入浴券を所持する浴客は二階に案内し茶を供す

三、…同第二種入浴券を所持する浴客は単に上等温泉入浴に止まるものとす

四、…西温泉第一種入浴券を所持する浴客は二階に案内し茶を供す。同第二種入浴券を所持する浴客は単に上等温泉入浴に止まるものとす

見はらしのよい三階で茶菓子までサービスした上等温泉制度は大正末期までつづいた。



上等客に茶菓子を出した不老泉

●流川物語り 第百二十六話 ●日名子物語3

最大の武器、宣伝

昭和四十年三月十八日掲載

助役が温泉課長を兼務するという習慣は大正十三年市制がしかれるまでつづいた。明治四十二年には砂湯管理規定もつくり、砂かけばあさんたちの身分保証や、浴客がからだについた砂を洗い落とす「上がり湯」の設備なども大いに改善した。

明治四十五年に鉱泉取り締まり令が県令として公布されたのも、明治二十一年代に別府の内湯十四軒が明治四十年代になると千百七十四軒に激増、このまま勝手に温泉を掘っていたのでは将来が思いやられると、乱掘防止を目的に県に働きかけたからで、このときから温泉保護が法的に確立されるようになった。

日名子太郎は新聞に興味を持ち、中央の新聞社の別府通信員もやった。その縁で明治三十九年に西村天囚を招いた。天囚が書いた「豊後路」と題する紀行文は、別府温泉のすばらしい自然条件を初めて全国紙に連載したもので、二十六回という長編の連載で別府の名が一度に全国民に知れ渡った。

「宣伝こそ最大の武器」という現代のマスコミ的な方向をその時代にしっかりとつかんでいた人だ。中央の新聞に二十六回も連載したあと翌明治四十年十月には菊池幽芳を招待した。

幽芳はこれを「別府温泉繁昌記」と題して今度は三十七回にわたり中央の新聞に連載したほか、明治四十五年五月に百二十七ページの単行本（三十五銭）にして発行した。流川四丁目の明倫堂が西日本相互銀行別府支店の場所に「斎藤明倫堂書店」の看板をあげている時代で、同店がこの本の「豊後別府町大売りさばき所」になった。明倫堂も古い歴史を持っている。

別府温泉繁昌記というのは別府温泉がどんなにおもしろく遊べ、温泉が文字通り日本一大規模であるかを大衆的に読みやすく、おもしろく書いてある点では、別府温泉宣伝史に残る歴史的な文献といえよう。鉄輪の「むし湯」に幽芳と日名子両氏が入るシーン…

「女中さん、柱のとこをまたげて入んなはれ…頭をふんだらいかんで、足をこっちにやりなはれ」

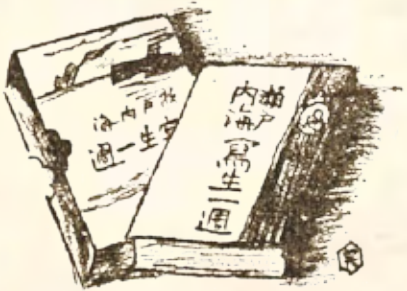
僕の鼻先をふさいだ白い尻の持ち主がまだまごまごしているらしい、日名子さんが「どこがすいとるな」と声をかける。「ここがす

いちょるで…」「二人入れるかな」「二人でも三人でも入れる、九人きりぢァに優に入れる…」

老人の先客が若い女と日名子さんたちの世話をやいてくれる情景が、ほほえましく描かれている。全文がこんな調子だ。豊富な内容とともに一読をすすめたいが、いまは古本屋でも貴重な文献でなかなか手に人らない。

また明治四十四年三月、大阪商船内航部（関西汽船の前身）が別府宣伝のために、当時画壇で有名な石川寅治、吉田博、渡辺審也など太平洋画会に属する八人の画伯を東京から招いたとき、日名子太郎助役が接待役を引き受け、楠湯や浜脇、鉄輪の温泉などの女湯に案内。「どうぞご自由にスケッチしてください」と女湯の中にのこのこ入っていって、画伯たちをびっくりさせた。お湯の中の女客たちは平気だった。

当時のもようは「瀬戸内海写生一周」と題して絵と紀行文をまとめて単行本になった。その中の一文「女湯の写生の人物を直すために料理屋の浴場を借りそこの女二人をモデルにたのんだ。するとほかの女が幾人もとびこんできて、雇ったモデルよりもほかの女の方がかえって役に立った」…おおらかな、たのしい時代が目に見えるようだ。



別府を紹介した「写生一週」

●流川物語り 第百二十七話 ●日名子物語4

小説「百合子」

昭和四十年三月十九日掲載

日名子太郎の招きで別府のすみからすみを見てまわった新聞記者兼作家の菊池幽芳は「別府繁昌記」のほか別府視察で取材した材料をもとに小説「百合子」を発表した。

この小説の舞台はもちろん別府がほとんどで、田の湯や楠湯、竹瓦温泉、霊潮泉など有名な温泉を二人の若い女性が見物して歩くところが、つぎのように描かれている。

……温泉めぐりには二人とも少なからぬ興味を覚えた。わけても竹瓦の湯や霊潮泉の砂湯を好奇の眼で見て帰った。しかし温泉めぐりの間には二人が顔をあからめあうようなこともあった。二人は百合子の室へ帰ってくると

「だいぶ歩いてきたわね貴女疲れないこと」

「いゝえ面白かったわ、どの町を歩いても温泉があるような気がするのね。それがみんな道ばたに…」

「裸の人が往来から見えるのはいやね」

「こゝの人は何とも思っていないらしいわ」

「貴女、砂湯どう思って、鰌（どじょう）が泥の中にいるようには見えなくって」

「そうね、あれは砂が黒いので泥のように見えるんですってね、おなかの上に山のように盛りあげて寝ている肌の白い人があったわ、苦しくないでしょうか」

「かえっていゝ気持でしようよ、貴女してみたかないこと」

「貴女と二人っきりなら」と笑って

当時の室内砂湯風景

「あんな人なかではねえ、男の人などが覗きにくるんですもの……誰か洋画をかく人が三脚を立てゝ女湯を写生していたわね」

「写真機を持って立っていた人もあったわ、随分ねえ…」

この二人の会話は、そのまま日名子太郎と菊池幽芳の二人の会話にあてはまるようだ。

案内役の太郎が砂湯のことを説明しながら「砂湯は見た目にはきたないが、ポカポカあったまって、たのしいものですよ…」としきりに宣伝しているようすが手にとるようにこ

の作品の裏に流れている。

中央の作家や画家、報道関係者の書き残した作品は当時の別府のためにすばらしい宣伝となったが、同時に現在の時点からとらえてみても、明治末期の別府のもようを知るうえに貴重な史料を提供している。たとえば

「浜脇の砂湯の中には十二燭光ぐらいの電灯がただ一つ、この電灯が面白い、十分毎にきっと暗くなる。そして一、二分は暗いまゝ、原因をきいてみると別府の電灯の原動力は別府-大分間の豊州電気鉄道の電力のおあまり頂戴なので電車の発着ごとに暗くなるそうだ。この電灯のできる数年前までは暗いランプだけだったとのこと…」

「室内砂湯は一区切りに十人ほどならぶが春のシーズンには十五、六人もつめこむそうだ。アワビ貝やブリキの小桶で砂をしゃくってはかけた。丸太の仕切りの木が枕になって寝るのに都合がよかった。…」

「無料浴場には番人もいないが脱いだものも盗まれなかった。…」

別府に住んでいる現代の人に昔の別府のことを教えてくれる役割りも大きい。

●流川物語り 第百二十八話 ●日名子物語5

恐るべき卓見

昭和四十年三月二十日掲載

明治三十九年、さすがの文化人日名子太郎でもびっくりするような提言が別府町に寄せられた。

一…鶴見山頂のぎょう霜（霧氷のこと）の美観は邦人の多く知らざる所にして、登山電車（ロープウエー）ひとたび成らば、たちまち世界の一景となりて外客を万里にひかん。

一…登山鉄道すなわちケーブル・カーなり、山の湖水に登山鉄道をひき、ホテルの設備をなせば関西一帯はもとより、遠くコロンボ以西の外客も夏季みなここに集中すべし。

一…熱帯植物園をつくるべき所は帝国内においてもこの地のほか他に求むべからず、剣戟の如き摩天の大葉地上より突起し（フェニックスのこと）、ヤシやビンローなどと一緒に繁茂すればホンコンやシンガポールの美景を奪いとることも可なり。

一…ビーヤホールもまた可ならんか、ビーヤホールとは居酒屋以上にして料理屋以下をいう、

ちょっと一杯やることを得ば木賃安泊りの諸君も大いによろこばん。

一…レストーランというものをつくりホテルと兼ねるも可。

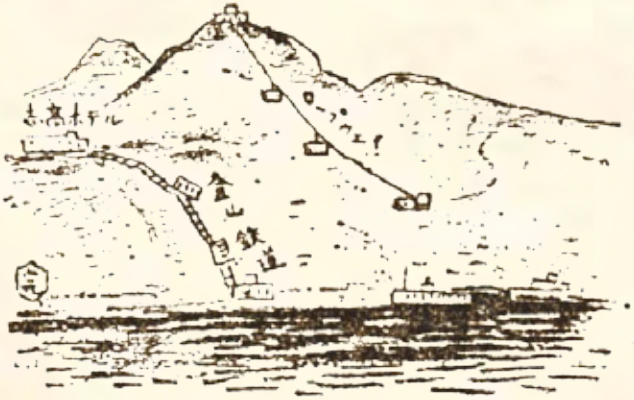
一…カッフェーというものをつくるべし、西欧諸国到る所カッフェーの設けあらざるなし、ビール、コーヒーをのみながら談話に資す可く、絵はがきも置けば客は友人に便りを書き、新聞もおけば客はほしいままにそれを閲覧すべし。

一…一大築港はついにはやむべからず、今の波止場は沿岸航海のもののみ、かかる波止場をもって内外の大船、巨船を招かんと欲するはエビをもってタイをつらんとするよりも道慾なり

一…海水浴場の如きも、少しは欧州の海浜を見習い王孫貴媛の来泳を迎う可し。

一…全市に公園の敷地を保留する必要あり、今より予画しておかねば地価は値上りして市力をもってしてはこれをいかんともする能わざるに至らんのみ。

一…停車場の位置を予選しおくの必要あらん、停車場の位置は



予定通り発展した別府市

その町の繁栄と、もっとも深き関係あればなり。

一…市区改正もまた同じ、今の別府町は速見の町のみ、一県の町としてみるを得ず、いわんや未来東洋の安楽郷にまで推し上らんと欲するにおいておや。

一…道路こそ第一なり、よろしく海浜より山の手にかけて

一…大広路線を画し、他日馬車をかりて内外の客の走るにまかせるの計をなせ、とくに外人の遊覧地となさんと欲せばこの道必須不可欠なり。

このような当時としてはただひとり指摘しなかったすばらしい提言をしたのは、九州日報社長兼主筆の福本日南という人物。

明治三十九年六月九州日報紙上に「入豊雑記」と題して別府町当局者あてに将来の別府大発展策として連載された。

鶴見山の霧氷のすばらしさを指摘し登山電車を山頂にかけたり、ホテル、レストラン、ビヤホールなどレジャー産業のレイアウトを提言したのは明治時代としてはよほど進んだ知識を持つ大人物といわねばなるまい。

この日南先生は最後に

一…石川や浜の真砂はつくるとも世につきざるは泥棒と助兵衛なり、よろしく遊廓を大拡充して大いに黄金を温泉のごとく使わすべし。

日名子太郎がびっくりしたのも無理はない。現在の別府の姿を八十年前にピタリと予言している。

●流川物語り 第百二十九話 ●日名子物語6

日名子君太郎

昭和四十年三月二十二日掲載

日名子太郎は郷土史家としての学究的な努力が認められて、大正十年に大分県史跡名勝天然記念物調査委員を県から委嘱された。五十七歳だった。この辞令をもらってから彼の史跡あんぎゃは、県下のすみずみまでおよんだ。ワラジにきゃはんの軽装でツエをつきながら山から山、村から村を歩きまわった。

別府近代化への彼の理想が上水道、市区改正、温泉改良などすべてに結実し、軌道にのったいま、彼の心は晴ればれとして足どりも軽かった。再び郷土史という学問の中に自分の人生を投げこんだ。歩いては調べ、調べては歩き。

▽直入、玖珠、日田の名勝
▽速見、玖珠、日田、別府の古墳、横穴調査一覧表
▽装飾古墳
▽宇佐郡古墳横穴調査一覧表
▽大野郡古墳、横穴調査
▽直入郡古墳、横穴調査
▽速見郡、宇佐郡横穴調査

そしてもっとも輝かしい仕事といわれた「大分県金石年表」前編のできたのは昭和十二年、彼が七十三歳

の年だった。この金石年表はひきつづき後編に入り、彼の死の直前に前後編が完成した。印刷製本して世に問うための準備もすすみ、もっとも知遇を得ていた徳富蘇峰先生から真情あふるる序文も送られてきた。

「友人柚軒日名子君太郎大分県金石年表」を著し、一言を予に徴す、君は豊後別府に於ける名家の一にして、恐らくまた最旧家の一であろう（中略）特に郷土史に就て…」

この熱意こめた序文を手に、よほどうれしかったとみえ、当時大分合同新聞の前身の新聞編集長をしていた飯倉士郎（別府市末広町居住）に新聞掲載方を連絡してきた。序文の書き出しのところに「日名子君太郎」とあるのは「日名子太郎君」の間違いではあるまいかと新聞社で調べてみると、蘇峰が親友に呼びかける場合は姓の下に君を先につけることがわかった。

前後編あわせて大分県金石年表は彼が明治四十五年から昭和十五年までの三十年間にわたる調査、点数にして八百五十一点が収められている。本の巻頭文の中で日名子太郎は「豊後に於ける金石文の研究は碩田後藤真守先生に始まるというべし…」と後藤碩田から受けた影響が強かったことも書き残している。

昭和十五年三月、史跡調査に出かけてカゼをひき、同月十五日ついに七十六歳をもって他界した。学究的な立ち場から親交のあった人は徳富蘇峰、犬養木堂、渋沢栄一、鳥居龍三…。別府宣伝と文化的な温泉都市建設の面で交遊があったのは西村天囚、松崎天民、菊池幽芳、横山健堂、菊池寛、久米正雄、小島政二郎、佐藤巌、佐藤蔵太郎…。彼が尊敬していた第一の人物は帆足万里…。

その生涯を別府のためにつくした日名子太郎は、遠い祖先から受けついだ郷土発展への献身を、七十六歳の全歳月のなかで心残りなくつくした。しかし印刷所に回す金石年表の原稿を病床で手にしながら本になるのを待たずに死んだ。

むすこの泰蔵、元雄の名で本が世に出たのは彼が死んで百力日がすぎたころだった。

大分県金石年表

オオイタデジタルブック DIGIAL BOOK OITA

オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「別府今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！！

大分合同新聞社　NAN-NAN（なんなん）　別府大学

■別府今昔

大分合同新聞夕刊に一九六四年十一月一日から一九六五年十二月四日にかけて連載された記事。明治大正のころを知る三百六十九人に対する取材をもとに、同紙の故是永勉氏が書き上げた。挿し絵は大分大学教授だった故武藤完一氏が担当した。

デジタル版
「別府今昔」流川物語り(10)
二〇〇六年七月二十八日初版発行
著者　是永　勉
さし絵　武藤　完一
編集　大分合同新聞社
制作　別府大学情報教育センター
発行　NAN-NAN事務局
〒八七〇-八六〇五
大分市府内町三-九-一五
大分合同新聞社　総合企画室内
問合・情報提供はこちらからも→クリック

© 大分合同新聞社